

SCG084-P17

会場:コンベンションホール

時間: 5月25日17:15-18:45

海成段丘を指標とした下北半島の第四紀後期隆起速度分布と沿岸断層の活動性評価

Late Quaternary uplift rate using marine terrace across the Shimokita peninsula, northeastern Japan forearc

松浦 旅人^{1*}, 小松原 純子¹

Tabito Matsu'ura^{1*}, Junko Komatsubara¹

¹産業技術総合研究所

¹AIST

海成段丘を指標にして下北半島の第四紀後期隆起速度分布を把握するとともに、沿岸断層の活動性評価を行った。MIS5.5海成段丘面の汀線高度は、尻屋崎、蒲野沢付近でそれぞれ標高43-45 m, 30 m程度とされてきた。これらの高度分布は西方に向かって低くなるため、西傾斜の沿岸断層の活動による可能性を示唆する。しかし、海成段丘面が示す旧汀線高度は、旧汀線指標の上に載る堆積物（海成層、コルビウム、レス、テフラ）によって過大評価されている場合がある。今回行われた尻屋崎での地下掘削によって、洞爺テフラ（MIS5.4）および円磨された巨礫に覆われる波食台を認定した。現在の海岸付近での観察結果によると、巨礫はstorm boulderと解釈される。そのため、この波食台が示すMIS5.5の汀線高度は標高25-26 mとなり、既報の1/2-2/3である。この結果は、下北半島を横断する隆起速度分布を再考する必要性を示す。さらに沿岸断層が島弧外帯の隆起要因か否かを検討する必要がある。本研究は原子力安全・保安院「平成20年度地層処分に係る地質情報データの整備」として実施した。

キーワード:海成段丘,下北半島,第四紀,隆起速度,沿岸断層

Keywords: Marine terrace, Shimokita peninsula, Quaternary, Uplift rate, Offshore fault